"Honour is the subject of my story"

友　清　蓉　子

聖油を塗られた王である Richard II の性格の弱さと，運命に対して常に受け身のようでありながら機会だけは決して逃がさぬ Bolingbroke の強さ，との対峙はあるものの，誰れ一人として積極的な行動をとる者が無く，何一つとして "action" にまで到る事の無かった *Richard II* の世界では，それでも時は急速に流れ，新たな歴史が作られていく，という何か人間を超えた歴史そのものと言ってもよい力の存在を感じさせた。しかし，たとえ手を汚さずに王位を手に入れた Henry V と，際立った事を何もせず政権を手に入れた Octavius の立場が似てはいても，(そして，Pompey—Caesar—Conspirators—$\frac{\text{Antony}}{\text{Octavius}}$—Octavius という歴史の流れはあるが，) *Richard II* で強く感じられたこの「人間を超えた力」は，*Julius Caesar* ではもはや感じられない。Caesar の死，ローマの内乱，そしてそれに続く Antony と Octavius への政権の移行は，元はといえば Brutus という人間の判断と行為のもたらしたものであったからである。Caesar の独裁政治を倒して大きく政局を変えようとする隠謀者の中心人物として，「いかに為すべきか」に心を奪われた一人の人間の生き方を，Shakespeare は厳しく見つめているようである。

なぜ Caesar を殺さねばならなかったか，という問には Brutus 自身の言葉にその答を譲る事にして，今しも Pompey を破って凱旋し，力に於てその右に出る者のない為政者であり，Brutus にとっては "best lover" (III, ii, 49) であった Caesar を，人々の尊敬を一身に集めて，世の人の鑑ともいうべき Brutus に殺す決心をさせたのは何であったろうか。その渦

中にあって判断し行動する登場人物を，一歩離れて観客という立場から我々が見る時，我々の視点とあまり遠くない所に Shakespeare の劇作家としての眼を意識せざるを得ない。

Brutus を行動に踏み切らせた要因は劇の冒頭から周到に準備されていく。以下，これを順を追って述べてみよう。

その一，Brutus の心を占めている "passions of some difference" (I, ii, 40)。これは漠とした，政局への不安であろうか。ともかく他人による外からの働きかけのある前に，Brutus に自分の触覚で感じとった危機感のようなものがある事は重要である。

その二，他人，即ち Cassius による働きかけ。ルーパカルの祭日に Cassius は Brutus を道端で引きとめてあれこれ打診する。その時の Brutus の台詞：

> Bru. If it be aught toward the general good,
> Set honour in one eye and death in the other,
> And I will look on both indifferently:
> For let the gods so speed me as I love
> The name of honour more than I fear death. (I, ii, 85-89)
> （下線筆者）

の "honour" という言葉にそれまで手をつかねていた Ccssius は Brutus の「弱点」をかぎつける。すかさず，"honour is the subject of my story" (92) と受けて，ここに Cassius が Brutus の "honourable metal" (I, ii, 313) に働きかけて，これを自分に有利な方向にもっていこうとする姿勢がきまる。

その三，B．C．509年に王政を廃して以来，共和政をとってきたというローマの歴史的，社会的風土にあって，一方に，王位を欲しているらしい Caesar があり，他方に，これを与えたがっているローマの民衆がある。Brutus は，Caesar が王位につくことをひどく恐れていて，Cassius との話の途中，民衆の歓声が聞こえただけでそれが何のためのものであるかを

知るほどである。(I do fear, the people Choose Caesar for their king. (I, ii, 78-79))。

その四，自分の祖先である Lucius Junius Brutus が，Tarquine をローマから追い出して王政を終らせた，という史実の Brutus に訴える力は大きい。Cassius もこの力に気づいており，Brutus にこれを想い出させる (I, ii, 159-161)。それは，Brutus に家柄に対する誇りと，それに伴なう社会的責任をよびおこしたに違いない。これによって Brutus の "honour" に訴えかけようとする Cassius の目論見があたったことは，Brutus が一人になってもう一度これを想い出す (II, i, 53-54) 事でも明らかである。

その五，Caesar が王位を欲しているというのは，あながち Brutus の憶測にすぎない事ではない。広場での出来事を話してきかせる Casca の描写に彼特有の皮肉な調子 (his sour fashion (I, ii, 180)) はあるが，Caesar が真実王冠を欲しているという確証に近いものを，広場から帰る途中の Caesar の一行を Brutus に目撃させる事によって得させている。

> Bru ..... look you, Cassius,
> The angry spot doth glow on Caesar's brow,
> And all the rest look like a chidden train:
> Calpurnia's cheek is pale; and Cicero
> Looks with such ferret and such fiery eyes
> As we have seen him in the Capital,
> Being cross'd in conference by some senators. (I, ii, 182-189)

その六，Cassius の煽動文。Cassius に Caesar 暗殺を示唆されて以来，心の安まる間のない Brutus の鋭くなっている神経の同じ場所を何度もくりかえしつつくような Cassius のやり方である。

その七，Brutus の論理的飛躍。少くとも現在の Caesar には為政者として何一つ殺す理由がない，と Brutus は思っている (II, i, 20-21, 28-29)。しかし，問題は彼が王位を欲している事である。王位についてから彼がどう変化するか，Brutus にはそれが恐しい。王位は Caesar に針 (a sting

(II, i, 16)）を与え，憐憫の情（remorse (19)）を取り去り，野心（ambition (22)）を満たすが，同時に彼の心に軽蔑を産み，この事は後に取り返しのつかぬ大事（extremities (31)）をもたらすに違いないと考える Brutus は，まむしの卵（a serpent's egg (32)）のうちに Caesar を殺してしまおうと決心する。必ずしもそうなると決まった訳ではない Caesar の将来を危ぶんだ Brutus の思考の粗雑さは，彼を行動に踏み切らせた大きな要因である。

その八，公のためになら，（for the general (II, i, 12)）とする私よりも公を重んじる Brutus の性格。個人的恨みを Caesar に対して全く持たない Brutus は，自分だけのためになら親友の Caesar を殺そうと決心する事はなかったはずである。公的なものに対する Brutus の比重の置き方が大きかったために，行動に踏み切るまでに心が傾いていったのである。

その九，と，その十，は背後にあって Brutus に少なからず影響を与えたであろうと思われる事柄である。

その九，ローマの民衆の頼りなさ。つい先頃 Pompey を歓呼の声をあげて迎えた民衆が，手のひらを返すようにその Pompey の息子を破った Caesar の凱旋を祝う姿 (I, i) に，民衆がしっかりしていれば Caesar も暴君にはならないであろうに（he would not be a wolf, But that he sees the Romans are but sheep: He were no lion, were not Romans hinds. (I, iii, 104-106)）という Cassius の言葉の真実性がうかがわれる。

その十，Marullus と Flavius という二人の護民官による Caesar に関する台詞：

> These growing feathers pluck'd from Caesar's wing
> Will make him fly an ordinary pitch,
> Who else would soar above the view of men
> And keep us all in servile fearfulness. (I, i, 77-80)

これは，彼らが陰謀に加わらなかった事，（事の起こる前に免職になって

劇から姿を消している）と，事の具体化する前の発言である事から，かなり客観的なひびきを持っていると考えられる。又，こういう言葉を陰謀に関係のない者にも吐かせるという社会状況と，彼らが Caesar の像から飾をはずして免職になった事実は，Brutus に対して示唆するものが少なからずあったと思われる。

最後に，Caesar の人物像，作者はそれぞれの登場人物に Caesar の人物像を様々に結ばせている。同時に，観客が直接知る Caesar の姿もある。Brutus にとっては，為政者として "affections" が "reason" に優位を占めた事がなく (II, i, 20-21)，彼の死後も，"the foremost man of all this world" (IV, iii, 22) と，ためらいもなく称える事のできる人物であった。一方，Cassius にとっては，自分と変わらぬ人間，もしくは肉体的には自分より劣っている人間 (I, ii, 93-131) であるにもかかわらず，"god" (I, ii, 116, 121) か，"Colossus" (136) のような巨大な存在になっていて，自由人としての自分を脅やかすものであり，Decius にとっては，追従によってどのようにも操る事のできる人物であり，Caesar の王冠辞退を目撃した Casca にとっては，王位に未練たっぷりの人物であり，Pompey をほめたために怒りをかった Ligarius にとっては，自分の上にいつ災いとなってふりかからぬともかぎらぬ存在であった。我々が直接見る Caesar は，迷信に心惹かれる事があったり，妻の夢見の悪さに外出の決心が鈍ったり，欲しくてたまらない王冠を退けて昏倒し顔色が冴えない等，非常に人間臭い人物として描かれている。人間として完璧ではないが，又，暴君でもない，凱旋将軍として今を時めく人物ではあるが，その本質は極めてあたり前の，普通の人間として描かれているように思われる。そういう人物の中に，暗殺の必要をみいださしめるべく，個人的には何の悪感情も持たない Brutus に働きかける Cassius その他の登場人物の Caesar に対する負の人物像の持つ力は大きい。

以上のように，Brutus に働きかけて判断を迫り，行為に踏み切らせた

内からと外からの要因は多いが，この働きかけを受けて判断を下したのは，他ならぬ Brutus 自身であり，Brutus という人間なくしては何事も起こり得なかった事を考えると，Shakespeare の視点が人間そのものにむけられていると言う意味が明らかになるであろう。

Brutus に働きかけた要因として最も力をもっていたのが Cassius であったのは言うまでもない。Cassius が Brutus に働きかけた意図は次の Casca の台詞に言い尽されている。

> Casca. O, he sits high in all the people's hearts:
> And that which would appear offence in us,
> His countenance, like richest alchemy,
> Will change to virtue and to worthiness. (I, iii, 157-160)

Casca の言う通り，Brutus は他の Conspirators にとって，その志を遂げるためには無くてはならない "alchemy" であったのである。そして彼らの希望通り，Brutus はそれと知らずして alchemist たらんとした。それでは "offence" を "virtue" に変える "alchemy" は実際にはどういう形をとったであろうか。"alchemy" の効果と結果は Casca の台詞の段階ではローマの民衆に対するものであったが，我々はその過程が一つ一つ展開されてゆくのを目のあたりに見る事になる。

Brutus と Cassius の考える Caesar 暗殺の理由づけのもつ性格を比較してみよう。

Cassius の理由が，Caesar に対する個人的感情から発している事と，現在の Caesar と政局に対する不満であるのに対して，Brutus のそれは，私心からではなく常に公のために，という感情の裏打ちがあり，又現在の Caesar にではなくて，将来の Caesar と，それによってもたらされる状況に対する恐れである。Brutus を仲間に加える事によって Cassius の理由は Brutus のそれにとってかわられ，Caesar 暗殺はここに大義名分を得ることになる。

次に，Brutus は Cassius の誓言の提案を退ける。理由は，する必要がない，すれば必要を認めて自ら事業の正しさ（virtue of our enterprise (II, i, 133)）と，精神の高邁さ（the insuppressive mettle of our spirits (134)）を穢す事になる，というのである。この事は，自分達がやろうとしている事柄が誓いを必要とするそこここにあるようなものではない，という認識と，行為をなすものとしての高い誇りをしめし，又，結果として，する必要がなかったという事実は，彼らの誓いに勝る高次の精神的結びつきと，Brutus に対する仲間の信頼の厚さを物語っている。

同様に，Cassius の Antony も共に殺害するという提案も又，Brutus は退ける。この判断に関しては，"lack of judgment" や，"analysis confused" の結果と考える批評家もいるが，これは共に，Brutus が Antony は Caesar の片腕くらいの存在でしかないから放っておいても大丈夫だ，(II, i, 181-183) という理由を判断の根拠にしたことを重くみている。しかし，実はこの時 Brutus にとって，はるかに重要であったのは，Caesar の暗殺をできるだけきれいにやりたいという事であったのではなかろうか。Antony まで殺せば "too bloody" (II, i, 162) になる。怒りにまかせて殺して，その上憎むようなものだ（Like wrath in death and envy afterwards (164)）。自分達は "sacrificers" (166) であって "butchers" (166) であってはならない。Caesar の "spirit" (167) に向って立ちあがるのであって，彼を殺すにあたっても，"wrathfully" (172) にではなくて，"boldly" (172) に振舞わねばならない。Caesar は "a dish fit for the gods" (173) であって，"a carcass fit for hounds" (174) にしてはならない。将来のローマと，ローマの民衆を圧政から救うためにどうしてもやらねばならない仕事ではある。しかし，Brutus の心の中には，Caesar 暗殺を "dangers" (I, ii, 63)，"a dreadful thing" (II, i, 61)，そして，暗黒の "Erebus" も隠す事のできない "conspiracy" (II, i, 78-85) と認識するもう一人の Brutus がいる。分裂した自己の苦悩は，わずかに不眠の嘆きとして吐露されている

が，後の悲劇のように明確な独白という形はとらないで，間接的に妻の Portia の口を借りて語られている。ベッドをぬけ出し，夕食の椅子を急に立ち，歩きまわり，考えこんでは留息をつき，腕をくんで，どうしたのかと尋ねると恐い顔でにらみつけ，もう一度尋ねるとあなたは頭をかきむしって足を踏みならし，何も答えずおこったように手をおふりになる，一人にしておいてくれというように (II, i, 237-247)。この苦しみこそが "alchemy" に Brutus を駆り立てたのではなかったろうか。どうしてもやらねばならない仕事ならば，自分らしくやる他はない。その一つの現れが Antony 殺害の拒否であったのだと思う。いかに為すべきかに心を奪われた Brutus は，Antony の力量を計り損い，後に彼によってもたらされる反撃の大きさの予測を誤まったのである。

Caesar 殺害の後，Caesar は無駄に殺されたのではない事をあたかも自ら確認するように Brutus は仲間によびかける。"Stoop, Romans, stoop, ..." (III, i, 105)。ローマに再び自由をとりもどすために屠られた Caesar の血に手を浸して，Brutus は "conspiracy" という暗い罪の意識をぬぐったのである。この場面は Calparnia の夢 (II, ii, 76-79) に正にあらわれていて，与えられている意味の大きさを印象づけている。

Antony の命を救った Brutus は，もう一度 Cassius の反対を押し切って Antony に Caesar の追悼演説を許可する。Brutus は確信している。Caesar を殺した理由を明らかにしさえすれば誰れもが納得すると。たった今，Antony でさえその一点を問うたではないか。そして自分は彼が Caesar の子供であっても納得させるに足る理由をもっている。それがあったからこそ，Caesar 暗殺に踏み切ったのであり，これを単なる殺人に終らせないためにどれほど心を砕いてきた事か。ローマの民衆ももちろん納得するにちがいない。彼らに理由を明らかにした上で Antony に演説を許せば，その事が Caesar 殺害に一点のやましさもなかった事を証明してくれるであろう。憎しみのために Caesar を殺したのではない事を，

敵方に追悼の辞を許す事でいっそう明白にできるではないか。Brutus には彼なりの理屈があったのである。Brutus にとっては，なぜ Caesar を殺さねばならなかったか，Caesar 暗殺という行為の裏にあった思考こそが重大であった。それがなければ，それこそただの残虐な光景というにすぎない (Or else were this a savage spectacle (III, i, 223)) 事を彼は知っていた。しかし，"savage spectacle" と認識する行為を Brutus はどれほど高め得たであろうか。

以上のような Brutus の判断といった明確な形はとらないが，劇の始まる前にすでに確立されている Brutus という character そのものによって "alchemy" の作用がなされていることもつけ加えておきたい。Lucius や Portia に対する優しい心配りは，今更指摘するまでもない。Caesar の死に際しての言葉，"Et tu, Brutus!" (III, i, 77) には Caesar の Brutus に対する信頼の厚さと，二人のそれまでの深い人間関係が端的にあらわれている。劇中誰れ一人として異論をはさむ者のない honourable man である Brutus が，それほどに Caesar から愛されていながら，その Caesar を殺害するという行為に立派な理由がないはずがない，という "alchemy" である。

巧く利用してやるつもりであった Brutus の "honourable metal" は，Cassius の予想をはるかに上まわって働いた。二人の間に意見の対立が再々あったのはそのためである。そしてそのたびに Cassius が Brutus に譲ったのは，他ならぬ "honourable metal" がそこに介在するのを Cassius が認めたからである。

Brutus を honourable man として，その性格づくりがなされた事は間違いない。彼の honour そのものを疑う時には，Antony の二面性を思い出しさえすればよい。演説のあと Antony の思惑通り民衆が動き出したのを見ると，彼は一人つぶやく。

Now let it work. Mischief, thou art afoot,
Take thou what course thou wilt!

.....

Fortune is merry,
And in this mood will give us any thing. (III, ii, 266-267, 271-272)

民衆を前にしていたそれまでの Antony の本心は，もはや疑うべくもなく我々に明らかにされている。Brutus にはこの類いの傍白はない。とすれば Shakespeare の意図は，あくまでも Brutus = honourable man と考える他はない。ただし，honourable であれば又，そこから生ずる愚かさ，自己過信，自己中心性のある事も作者は見のがしていない。劇の後半では，すでに前半に内包するこの "honour" と "honourable metal" のもつ矛盾が，一挙にふきだしていくように思われる。

最初に，その矛盾をついたのは，Caesar の追悼演説をする Antony であった。演説に先だって，暗殺直後の Brutus に会った Antony は，Brutus の言葉に行為と観念の乖離を敏感に感じとったに違いない。

Though now we must appear bloody and cruel,
As, by our hands and this our present act,
You see we do, yet see you but our hands
And this the bleeding business they have done:
Our hearts you see not; they are pitiful;
And pity to the general wrong of Rome—
As fire droves out fire, so pity pity—
Hath done this deed on Caesar. (III, i, 165-172)

"bloody" で "cruel" な "hands" と，"pitiful" な "hearts" と。Brutus にとって重要な意味をもつ "hearts" が，Antony にとってはどれほどの意味を持ち得たろうか。Caesar の死という厳然とした事実と，血に染まった Caesar の死骸の持つ無言の力は，たとえ Antony に Brutus のいう "hearts" の意味がわかったとしても，それが全く問題にはならぬほど大きな力をもっていた。一人残された Antony の台詞に "butchers" (III,

i, 255) "the cruel issue of these bloody men" (294)) の言葉があるのがその間の事情を物語っている。自分に対して働きかけたこの二つの力の関係を，Antony は演説の場でローマの民衆に対して用いたのである。"honourable men" という言葉を十回もくり返し，もう一方に具体的，かつ直截的な事柄を並べて対比させて，民衆の心の中でついには，"honourable men" を "traitors" (III, ii, 158) に変化させてしまった。Brutus がそれまで必死に守ってきた "hearts" は "hands" の前に跡形もなく消えたのである。それが Brutus の "honourable metal" の判断のもたらした，Antony 殺害の拒否と，追悼演説の許可の結果であった事は，真に皮肉であると言わねばならない。

何事を決定するにも一度は意見の対立をみてきた Brutus と Cassius の二人が，ローマ脱出後再会した時の口論の場面を，Winston Churchill は次のように書いている。

> 彼は（ブルータスは）自分の天幕の外に立って，キャシアスが来るのを待っていた。二人とも自分達が置かれている情勢の急迫に心が歪んでいた。ブルータスはおのれの廉潔，理想，自尊の念をあくまで固持し，傲岸不遜になっていた。キャシアスの方は貪欲と，あまつさえ収賄の誘惑に屈し，ブルータスにたいする深い友情と尊敬との底に嫉妬と怨恨とを隠しもっていた。
>
> （福田恆存訳「ジュリアス・シーザー」解題・新潮文庫）

二人の人物に対する洞察は見事である。たとえ Antony に踏みつけにされようと，自らの "honourable metal" を信じる Brutus と，強い自我を持ちながら，Caesar 暗殺という目的のためにそれまで Brutus に一歩譲ってきた Cassius と，この場面では真向うからの衝突である。そこでは，多くの批評家が指摘するように，Brutus は，収賄で Cassius をとがめておきながら，他ならぬその手で Cassius が集めた金を無心すると

いう矛盾を犯している。開口一番の二人の会話にすでに，自らの "honourable metal" を恃む Brutus と，そのやり方 "sober form" にいら立つ Cassius の姿が明らかにされる。

> Cas. Most noble brother, you have done me wrong.
> Bru. Judge me, you gods! wrong I mine enemies?
> And, if not so, how should I wrong a brother?
> Cas. Brutus, this sober form of yours hides wrongs;
> And when you do them— (IV, ii, 37-41)

引用文最後の行のダッシュのあと，口をつぐんだ Cassius は果たして何を言いたかったのだろうか，さしずめ Antony の言葉を借りれば，"you give good words" (V, i, 30) というところであったろう。

最後に，会戦を直前に控えて両首脳の会見の席で，もう一度 Brutus は Antony に，今度はまともにこきおろされる。"In your bad strokes, Brutus, you give good words" (V, i, 29-30) は，ともかくとして，Lepidus を "ass" (IV, i, 21) と称した Antony 特有の口調で，暗殺の経緯は醜悪な動物のイメジで描かれる。おまえ達が，"猿" (apes (V, i, 41)) のように白い歯を見せ，"犬" (hounds (41)) のように尾を振り，奴隷のように平身低頭して，Caesar の脚にキスをしている間に，Casca が，"やくざ犬" (cur (43)) のように背後から Caesar の首に一撃を与えたのだ。Caesar 暗殺に対する Brutus の思いと，これは又，何と異っている事であろうか。しかし，この Antony の「挑発」に反応を示めすのが，Antony の言葉に痛みを感じたにちがいない Cassius であるのがおもしろい。Brutus は Antony の言葉に少しも傷つく様子もなく，Octavius に向って，自分の刃に倒れれば，無上の光栄の死に就くことができる。(thou could not die more honourable (Vi i, 60)) と言い放っている。

会見の後，Antony の圧倒的な強さに圧迫を感じたためか，Cassius は急速に Cassius らしさを失ってゆく。(V, i, 67-68, 71-89)。一方，Brutus は

Cato の自殺を批判して健在ぶりをみせる。その Brutus の別れの言葉を Cassius は忠実にくり返す (V, ii, 117-122) が，それはまるで Cassius が Brutus に完全に同化されてしまったような感じを受ける。しかし，Brutus も又，最後は Cassius が暗示し，先に行ったように自害して果てる。言葉では Cassius が Brutus に，行為では Brutus が Cassius に同化して二人の人生は終っている。Caesar の肉体的欠陥を嗤った Cassius の死が，自分自身の肉体的欠陥である "thick sight" (V, iii, 21) によってもたらされたのは皮肉である。Brutus の死に際しての言葉 "My heart doth joy that yet in all my life I found no man but he was true to me." (V, v, 34-35) には，それならばなぜ今彼は死なねばならないのか，という疑問が残る。彼は，Cassius が自分の肉体に裏切られて死んだことを自ら永久に知る事がなかったように，自分の "honourable metal" に裏切られた事を悟る事なく死んでいったのだと言う事ができよう。

ともあれ，Brutus の最後の言葉は "honourable metal" という類い稀れな性格を与えられた主人公を，その栄光も矛盾も共に厳しく見つめた目が更に深まって，偉大な性格の持ち主の，それ故の苦悩と，それに伴なう人間としての成長にむけられるようになるには，もうしばらくの間，時を待たねばならない事を感じさせる。(了)